

## 団体最優秀賞

## 団体最優秀賞杯を頂きました！

こばと修童館々長 中田 武太

真夏の日差しが照りつける外の猛暑とは裏腹に、武徳殿内は時折風が吹きぬける心地よい殿内でしたが、東伏見慈晃大会会長をお迎えし、青少年参加者百三十七名と本部役員の先生方や団体長・団体指導者と保護者応援団を合わせて二百五十人以上の人たちで、既に武徳殿内の熱気は沸騰点に達していました。

青少年参加者は勿論ですが、保護者の中には歴史的な大木造建築物の武徳殿の威容に圧倒された方もいらっしやっただけで、礼節を重んじる武道大会ですから緊張の中、静かに演武を見守る雰囲気は、他のスポーツと違う厳粛なものを感じられたに違いありません。

「祓の儀」は私の道場の中田太郎君（高一）でした。普段は上がるタイプではないのですが、この時ばかりは緊張がありありと顔や体に表れていました。それでも全観衆のまえで大役の勤めを果たしました。無我夢中だった彼は、今は分からなくても反省を含めて将来、得難い経験だったと感謝する日がくることを期待したいものです。こばと修

童館の子どもたちも先輩の演武に立ち会えたり、これまで稽古を重ねてきた成果を、全員力をあわせて頑張ろうと誓い合えたことでしょう。

さあ！三番目の出場です。こばと修童館はこの日のために、七月十一日・十二日の二日間合宿を張って、目標を団体優勝とはつきり定めました。指導者が満足できるまで反復稽古です。稽古は裏切らない。稽古をすればするほど自信に繋がるのと信念のもと皆はよく頑張ったと思います。その結果自然と、立ち居振る舞いが堂々としてきたし、技も気合が入って大きくなってきたし、合一性・協調性が出てきたし、目線がしっかりとってきたなど、チームワークのいい集団になりました。入退場の整列・礼、待機や休憩の態度についても、いつも以上に厳しく指導しました。彼らは猛稽古に耐えてきましたから、余裕を持って演武に臨んだように見受けられました。

しかし、自信満々に臨んだ演武の最中に、検証委員の先生から突然「待て！」の号令がかかり中断されたのです。一人の子の居合刀の下げ緒が外れて床まで垂れ下がってしまったのです。見苦しい事と、下げ緒を踏んで怪我をする危険性があったことで中断されたと思います。が、この時私は、これで万事休す、団体最優秀賞杯は逃したと頭の中をよぎりました。後から聞いた話ですが、『下げ緒を元に戻す落ち着いた動作や戻し終わった後、検証委員の先生に礼をした動作や、他の待機している子どもたちの落ち着いた態度が大変立派だった。礼節あるチームワークだった。』と失敗を帳消しにしたとまでは言えないにしても、大きな減点要素にならなかったようです。あそこで崩れなかったことが稽古を重ねてきた成果だったと思いますし、彼らの自信に繋がった証だったのでないでしょうか。その後、演武を終えた彼らは、他団体の演武交代の間隙をみて、時々前後の席を交代しながら最後まで